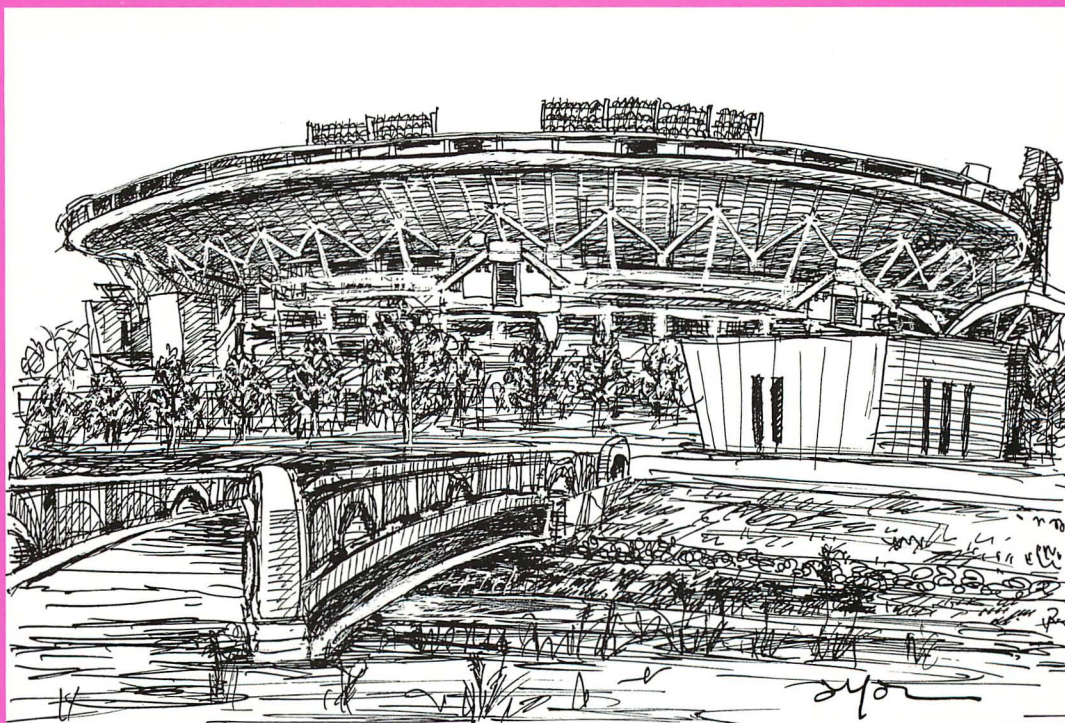


まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL.66



松山市 坊っちゃんスタジアム

特「21世紀の“農”を考える」集

- 久万農業公園アグリピア（久万町） 挑戦する農業
- もぎたて倶楽部（丹原町） 農業の楽しさと農村の豊かさを伝えたい
- 長岡ビーズ・ファクトリー（三瓶町） ガンバレ日本農業
- ワールド・ファーマーズ（吉田町） ワールド・ファーマーズは農家の手足です
- 愛桜会（川内町） 中山間地のこれからの“農”

■アングル

伊賀の里 モクモク手づくりファーム
木村 修

■論談—まちづくり—

愛媛大学農学部
中安 章

■キラリ光るまち

山形県 高畠町
河原 俊雄

好評連載

★歩キ目デス&足ラデス

岡崎 直司

アングル

21世紀に向けて新しい農業に挑戦しよう! …… 伊賀の里 モクモク手づくりファーム／木村 修 …… 1

◎『21世紀の“農”を考える』

- 挑戦する農業—久万農業公園アグリピア— …… 久 万 町／高岡 啓一 …… 2
 農業の楽しさと農村の豊かさを伝えたい …… 丹 原 町／山内 雅明 …… 4
 ガンバレ日本農業 …… 三 瓶 町／長岡 広幸 …… 6
 ワールド・ファーマーズは農家の手足です …… 吉 田 町／森崎 正 …… 8
 中山間地のこれからの“農” …… 川 内 町／菅野 哲三 …… 10

論談—まちづくり—

農産物直売所と地域内循環 …… 愛媛大学農学部／中安 章 …… 12

キラリ光るまち

帰農の里“高畠” …… 山形県高畠町／河原 俊雄 …… 14

リレーでちょっとーク

- みんなで育てる美川っ子 …… 美 川 村／大野 早苗 …… 16
 「光は南から」 …… 城 辺 町／兵頭 朝美 …… 17

まちづくり最前線

「ローズ館」奮闘記 ～レストラン編～ …… 吉 海 町／山口真佐美 …… 18

風おこしのちかい

県境から「泥んこのあったかさ」を発信 …… 一本松町／田中 俊二 …… 20

研究員レポート

- 長野へ 町づくりの先人を訪ねて …… 三好 誠子 …… 22
 「市民」の力～新潟県村上市を訪れて～ …… 森田 浩二 …… 23
 “元気な農業” モクモクファーム …… 橋岡 勝一 …… 24

MY TOWN うおっちんぐ 歩キ目デス&足ラテス

県境の島 弓削をゆく! …… 岡崎 直司 …… 26

Information

まちセンからのお知らせ …… 29

特集「二十一世紀の

“農”を考える」

本県も含め、わが国の“農”は、後継者不足等による農業人口の減少と高齢化、耕作放棄地の拡大など、たくさんの問題を抱えています。

しかし、「農は国の基」と言われるように、安全な食料の安定供給という面、また農村は国土保全や文化の伝承等、多面的な機能を有しており、それらは健全な農業の存在なしには、あり得ないように思います。

そこで、今号では、来たる二十一世紀の“農”について特集を組んでみました。農業を理解してもらうために市民農園、観光農園などで都市の方と交流したり、農作業の受委託で高齢化・後継者不足に対応したり、それぞれの地域で、積極的に問題解決に取り組んでおられる方がいらつしやいます。

“農”が元気になることは、地域に活気を与えていると思います。

(編集子 橋岡)

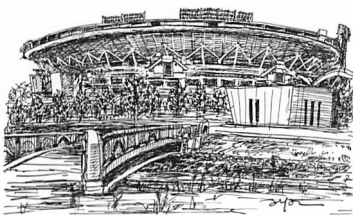
表紙の言葉

まるでUFOが舞い降りたように見える、坊っちゃんスタジアム。観衆三万人をもあつという間に吸い込んでしまう広さはすごい。

野球の大好きな子規さんに見せてあげたい程。全国にも誇れる設備を備え、障害者席多数、トイレ、芝生の水は雨水を有効利用。

近くを流れる川も景観に入れ、掛かる橋々もユニークで楽しい。

柳原 あや子



農事組合法人

伊賀の里モクモク手づくりファーム

社長理事

木村 修



私は、忍者と松尾芭蕉で有名な三重県伊賀盆地の中山間地域にある阿山町で、二十一世紀に向けて新しい形の農業に挑戦しています。言い換えれば、既成の農業観から脱皮し、新しい農業観を持った農業システムを構築しようと頑張っています。

それは今までのスタイルのままの日本の農業では、ますます斜陽産業に陥ってしまうという気がしているからです。

現状を見ても、若者の農業への新規就労があまりにも少ないからです。三重県でも今年の農業就労者がたった三〇名弱と、もはや農業国と言えない状況です。後継者が無いということは、農業に将来が無いということです。全国の農業者も六〇%が六〇歳以上という現状では、本当に日本農業の未来が心配であります。

それでは、何故、日本の若者の農業離れに拍車がかかっているのでしょうか。それは、農業に夢とロマンを感じないからです。若者にとっても、はや農業は魅力ある就職先ではないのです。

では、魅力ある農業とは何でしょうか。それは、格好いいイメージの農業をすることです。養豚業では格好よくないけどハム・ソーセージ製造なら格好いいビール麦生産なら格好よくないがビール造りなら格好いいとなります。また、それらを食べるレストラン経営なら尚格好いいとなります。

最近これからの農業は一次、二次、三次を含めて、六次産

業化であるべきだとよく言われますが、それを平たく言えば、生産・加工から流通・サービスまで含めた総合産業化を目指すことであるということです。

モクモクでは地元 銘柄豚からハム・ソーセージ、転作大麦から地ビール、転作小麦からパン・パスタ、転作大豆から豆腐製造などを行い、また米づくり、野菜づくりなどの生産を行い、それらを販売する直営店を県下に展開しています。また、農業公園も平成七年にオープンし、園内にレストラン、直営店などを併設し、年間三十五万人が訪れる施設となり、まさにサービスの本格的な業態に変化したのです。そして、会員制システムも導入し、現在二万四千人の会員も組織しており、会員向けの通信販売やイベント案内を図り、顧客管理と固定客づくりをしています。

これからの農業はダイレクタマーケティングが最も重要であり、そのことで付加価値と安定的な販売が実現できるのです。そして、農業がメー

カーに、また小売業に変化し、さらにサービス業に業態変化すれば、若者に魅力ある農業になる訳です。

二十一世紀は農家とか農民という単位ではなく、集団化、組織化、法人化という形で農業をしていく時代であると思います。農業を志す人達が資金を出し合い、知恵も出し合い、会社感覚で農業していく時代であると思うからです。モクモクでは誰一人資本家はいません。みんなが、わずかなお金を協同出資をして、自分たちの会社という感覚で運営をしています。このように、今までの農業スタイルではなく、新しい考えやシステムに取り組んで二十一世紀に生き残れる農業経営に挑戦していきます。

まだまだ課題はたくさんありますが、農業に夢とロマンを求めて挑戦していきたいと思っています。ぜひ、愛媛の皆さんも一度伊賀の里に来てください。そして私たちと交流をし、これからの農業を語りましょう。



大人気のイチゴ狩り

挑戦する農業 —久万農業公園アグリピア—

久万農業公園アグリピア 事務長
(久万町) 高岡 啓一

久万町は、昭和四十年から農業構造改善事業に着手して以来、数多くの助成事業に取り組み水田の圃場整備率は八四％に達してきた。又、農道改良、畑地造成、近代化施設の整備も並行して進めてきている。

現在、整備された圃場においては高原野菜の栽培へと移行し、トマト、ピーマン、キヤベツ、大根等の生産団地化が推進され、地域農業の基幹品目として定着し、阪神市場でトップレベルの品質評価を得ている。

しかしながら、地域の高齢化・担い手不足については危機的状況下にあり、農家の六五歳以上の就農者率が現在五二・三％を占めており、十年後の推計では七三％になることが予想されている。

久万町では、地域の担い手の創出と、久万地域の豊かな自然と農村資源を活かし、農業を核とした都市農村交流の展開拠点として「久万農業公

園アグリピア」をオープンした。

この施設は、農業を志す若い後継者を育成する「農業研修センター」、都市部の人々が家庭菜園を楽しむ「クラインガルデン」、都市と農村を結ぶ交流拠点「ふれあい広場」の三つのゾーンで構成されている。

〈農業研修センター〉

農業を志す人に、農業経営に必要な実践的技術や知識の習得を目的としている。

研修期間は二年間とし、トマト、イチゴ、花壇苗等の施設園芸品目の研修が中心となっている。受け入れた研修生に対しＵターン者十二万円・Ｉターン者十五万円の研修手当が支給されるとともに、研修終了時には三百万円を限度とした就農支援補助金が受けられるなど制度も充実している。

現在Ｕターン者三名、Ｉターン者三名、計六名の受け入



都市の人々が家庭菜園を楽しむクラインガルデン



花壇苗の研修 農業研修センター

〈クラインガルデン〉

れを行っている。

都市農村交流の目玉として開設した市民農園「クラインガルデン」は、六二区画を整

備している。

当農園は、農村型市民農園として一部ログハウス付き市民農園も設け、三タイプの貸出しが行われている。

契約は一年毎に更新され、最長二年を限度に継続可能としている。

この農園の最大のねらいは「都市と農村との交流が生まれる」ことにあり、農園指導や毎月一回の交流イベントは、地元住民が中心的役割を果たしている。

自然と共に感動ライフ

以上の取り組みを行いながらも現実的課題も多く、研修生の就農時の受け入れ体制作りや、地域に対する波及効果も踏まえての農場運営が必要であり、次のような新たな取り組みを展開している。

- ・ 個性的トマトの育成実証
- ・ 季節毎の花壇苗実証栽培
- ・ ホウレ草の連作回避
- ・ イチゴの適合品種と観光農業品目としての提案

・ 杉皮培地による栽培実証

（地域資源利用）

・ エコマルチ、抗菌資材利用による環境保全型農業の提案

現在までの成果としては、個性的な味を持つ中玉トマト「赤ずきんちゃん」が当農業公園から生まれるとともに、イエロー系の高糖度トマトも新たな品目に加わっている。

当園から生産されるトマト、イチゴについては、評価が高いことから次年度に向け栽培施設の増設を行っている。

この栽培施設については、第一に研修生に対する実践型の農業を体験せしめる目的がある。

又、第二の目的として、平成十三年度を目標に研修農場部門の経営自立を掲げており、研修手当を除く全てを経営軌道に乗せる計画である。

第三の目的には、農業公園の他方の事業である都市農村交流への活用である。

先程述べた「クラインガル

デン」は区画限定された特定交流であり拡大交流は望めず、今後の都市農村交流の「次の一手」として、この農場利用を打ち出した次第である。

農業品目のトマト・イチゴは、久万町の自然環境を活かしながら他に類を見ない個性的な商品となっている。この二品目については「収穫体験農場」を開設し、多くの人達が一年間を通じて「いつでも」「楽しく」収穫体験ができる場として開放する計画である。

都市農村交流については、今までの一過性の交流でなく、その地域の自然や文化・人のふれあいを通じ、「第二のふるさと」として永続的な交流が生まれることを最大のねらいとしている。

久万町のキャッチフレーズの中に「自然と共に感動ライフ」があり、このフレーズは当園の目指すべく究極の目標であり、あくまで「農」を通じてこのことを実現するかわりが農業公園としての役割

である。

最後に担い手育成については、当園が行う後継者育成だけでは地域農業の抱える課題解決とならず、今後地域レベルでの対策が急がれる中で、年内には久万町、JA松山市、受託農家組織の三会員で「久万町農業公社」を発足する。当公社は、課題となっている農地の保有合理化事業の展開、地域の担い手育成、地域農業の開発を柱に様々な事業展開を行い、久万町農業の明るい未来を切り拓く大きな期待がかかっている。



☎ (0892) 41-0040

農業の楽しさと 農村の豊かさを伝えたい

丹原もぎたて倶楽部 事務局
(丹原町) 山内 雅明

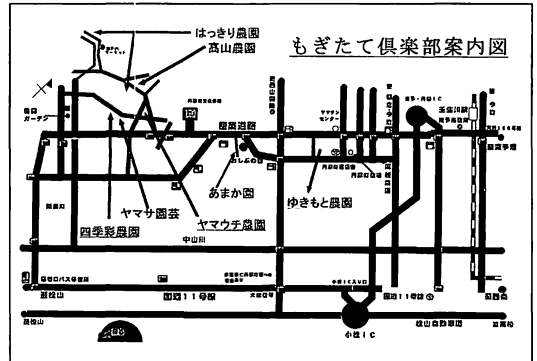
ています。

手取りを取り戻すために

最初にスモモ狩りで観光農園を始めてから十数年経ちましたが、この間に名産の「あたご柿」をはじめ農産物の価格が低迷し、農家も高齢化の一途をたどっています。いま主に農業を担っている六十歳代から七十歳代の人たちが卒業してしまう五年から十年後には、優良な農地が原野に帰ってしまうだけでなく、道も水路も共同で維持してきた共同体としての地域が崩壊してしまう恐れもあります。

人間も食えることなくしては生きていけません、その食べ物、いつでも、どこへでも世界中から輸入され手軽に手に入り、あふれるばかりに並べられています。

平成十一年の農業白書によれば、農水産物が加工・流通過程を経て付加価値を高め、外食も含めた最終消費の額は約八〇兆円。そのうち国内の



農水産物は僅か約一三兆円一六%を占めているだけです。

過去には何年かに一度不作などで価格が高騰して大儲けすることもあったでしょうが、飛行機で野菜が輸入されるようになり、農家にとっては安値安定になっています。

農林水産省統計情報部の資料(古いのですが)によると、大根1kgの小売価格は九〇年は一六七円、農家の手取りは八一円なのに、その前年、八九年の小売価格は一二九円、農家手取りは一六円。レタス

は大根以上の不安定さになっています。しかし、農家手取りが不安定で赤字であっても、流通経費はしっかり確保され安定しています。

流通や加工等の付加価値を農家の手に取り戻そうとするのが、直販、産直であり、観光農園のもぎ取りであると思います。

楽しい農業を目指して

ただこれまでは、今あるものを提供するだけだったり、また個々の農家の経営からするとほんの一部を観光農園として提供してきただけでした。

また生産からサービス業への意識の転換がスムーズにできないところもあり、観光農園に取り組む農家はあまり増加していないのが現状です。

出る杭は打たれる事を意識した自己規制と親や他の農家からの干渉によって、挑戦を躊躇する農家がまだ多いように感じます。楽しい農業、後継者ができる農業を目指さな

私たちは、丹原町内で観光農園を開園している七軒の農家のグループです。

春はイチゴ、初夏はスモモ、夏はブドウ、秋は柿狩りを行っています。

まだ個々の栽培面積も少なく、品数も少ないのですが、新鮮なものを求め、作り手の顔が見える安心感を求め、さらに手近な遊びとして収穫する楽しさを求めて、観光農園を訪れる人が徐々に増えてき

いと地域が崩壊する事態にな
っています。観光農園（直
販等も含むサービス業化）が
成功しているという実例を身
近に見ないとなかなか挑戦は
始まらないようです。

農作業の中で、一番労働時
間がかかるのが収穫です。だ
とえば、ブドウでは一〇分あ
たり四四一時間の作業時間の
うち一二六時間約二八％。イ
チゴなら二三〇〇時間のうち
一四八〇時間約六四％の時間
を費やします。私たちは農家
にとって大変だった収穫を、
楽しみとしてのもぎ取りに変
えています。

観光農園に取り組むことで、
価格の安定（出荷経費の削減）
と市場出荷だけでない流通ル
ートの多様化をもたらし、消
費者と直接触れ合い販売の喜
びを味わい、消費者のニーズ
を知ることができるようにな
ってきました。

生産し出荷するだけでは味
わえない楽しさとなっていま
す。自分の責任で運営されて

いる販売の場があることで、
励みになり仕事を生き生きさ
せ、農地だけでなく家族（特
に奥さん）にも可能性も拡げ
ています。

これまでのように出荷する
より気苦労もあり、駐車場や
トイレなど付帯施設も必要で
すし、土日祝日にお客さんが
集中し、その日の天気によ
り、少々は農園が荒らされ
るなどのマイナスもあります
が、余りあるプラスがある
と思っています。

農村の豊かさを四季を通じて

これからは、美味しい物を
作り、より安く提供するだけ
でなく、収穫体験、直販以外
に消費者が園内で余暇を楽し
めるような施設も準備しなく
てはならないと考え、この春
から、二日間で炭焼き体験が
できるようにドラム缶で炭窯
を作りました。竹炭を作った
り、竹酢液を蒸留したりと、
これからのシーズンに向けて
準備をしています。

また、今栽培している作物
に付加価値を付けると共に、
新たな作物、これから求めら
れる物にも挑戦したいと思っ
ています。今年の八月に発表

された愛媛県の果物野菜の県
外依存度を見てみますと、梨
は六七〇トン約二億二千万円
（県内消費の八割以上）、ブド
ウは二三九トン一億三千万円
（同じく県内消費の八割以上）
依存しています。まだまだい
ろいろな可能性があると思
います。仲間の農家ではサク
ラノボを植え付けました。

現在は広告宣伝を「もぎた
て倶楽部」で共同でお願い、
まだまだ充実しませんがホー
ムページも開設しています。
宣伝の基本は、口コミであり、
農産物がしつかりして、美味
しければリピーターとして毎
年訪れてくれますが、伝えな
ければ伝わらない事も多く、
さらに信頼を得るためにも、
また消費者は農家の仕事や暮
らしはなかなか見えないし、
農家を理解する「義務」もな

いわけで、農家が消費者の気
になる、魅力的な情報を送り
続けなければならないと考え
ています。

例えば、自分たちも楽しめ
て、訪れてくれる人たちも楽
しめる季節ごとのイベント、
周囲の景観も楽しめるような
仕組みも考えていきたいと思
います。

これからも丹原の立地条件
を生かし、収穫する楽しさだ
けでなく、植物を育てる、物
を作る楽しさ、農村の豊かさ
を四季を通して提供したいと
思います。

さらに農業に対する認識と
新しい価値観を地域にも提供
したいと思っています。



TEL・FAX (0898) 68-5212

ホームページ

<http://www.dokidoki.ne.jp/home2/masaa/>

ガンバレ 日本農業

(株)長岡ピースファクトリー

(三瓶町)

長岡 広 幸

サラリーマンから養豚業に

私は六年前まで本当の都会っ子でした。三大都市圏で三十六歳までサラリーマンとして過ごし、何の過不足もない生活をしていました。

ヒヨクなことから三瓶町の嫁さんを貰うことになり、何度かこの地を訪れて、海も山も目の前にあり、漠然とこんな所に住めたらいいなあぐらの気持ちでした。ところが、

いつの間にやら此処に居を構え嫁さんの実家の養豚をすることになっていました。よく変わり者と言われますが、至って普通だと思っています。

サラリーマン時代には石油関連の仕事をしていました。

消費材を仕入れ、販売する側にいた訳ですが、起承転結がないというか、いつ始まっていつ終わりになるか、とりあえずやっておこうかみたいな感じでした。いくら自分が儲けても(損しても)会社の看板を背負って商売していると、個人評価にはあまり影響がないというか。当時はまだ年功序列みたいな事も多くて、物足りなさが少しずつ不満になってきてたんでしょうね。

でも、十四年間の会社勤めは、いい意味で社会的な常識を学ぶ事ができましたし、対外的な交渉事もできるようになり、現在も当時の経験が大変役立っていると思います。

養豚は日、週、月、年単位できっちり成果があらわれ、



今は愛着がある豚たち

種付、出産、離乳、肥育、出荷と一つの流れが自分で把握できるのが大きな魅力でした。サラリーマン時代には理解できなかった経営者としての責任の重さも、感じるようになりました。

今でも思い出しますが、初めて豚舎に行き、豚を見た時は、あまりの数に驚愕し、可愛らしさより恐ろしさの方が先立ちました。まして牡豚を見たときは獣そのものでした。特に当時の牡は年代物で、牙が二五cmぐらいあり、絶句しました。「この牡を使って種付するなんてとても人間技ではない。あの大山倍達が戦った相手のヒグマでさえ手にグローブをはめ、口にはサルグツワをはめていたじゃないか」

と思いました。

しかし、現在は二五頭もいる牡の顔の区別も全部できますし、なんとなく愛着も沸くものです。何とかなるものだと持って生まれた楽天主義が、ここにも生かされたのかなと思っています。

進む日本の植(食)民地化

農業をワールドワイドで見た場合、先進国は、必ず農業基盤が整っています。工業生産物に対して農業生産物を引き換えに農業従事者を犠牲にするような先進諸国は例を見



良質の堆肥をつくるための機械

ません。あくまでまず農業、そして工業のスタンスは保っているような気がします。そのことを考え合わせても、これまでの日本の農業政策やマスコミ報道には問題があると思います。

USAは大戦直後から交渉を常に有利に運べるよう、目に見えない食料コントロールを既に実行していました。給食でのパンがいい例です。安い小麦を大量にもっていたUSAは、日本人がパンを常食化すれば、永遠に小麦が売れることを考えていたのでしょう。善し悪しの問題ではなく、流石だなと感じます。

今後このような植（食）民地化Ⅱ自給率の低下が進むことは間違いない事実だと思います。「じゃあどうすれば」との質問に対し、「ありません」と答えるしかないのが現状だと思います。このような大きな流れは変えられないでしょうし、国内農業は衰退の一途を辿ると思います。これも仕

方のないことなのかもしれません。

しかし、人間は生命を維持するため食物を食べなければなりません。その食べ物の基幹産業が農業なのです。

人間は、歴史上常に何かを奪い合う戦いを繰り返してきました。近未来的には食べ物を奪い合う戦いになるかもしれません。自分の命を守るべき食物を自ら作り出せず、他人に頼らざるを得ない日本は、奪う側になってしまうのかもしれない。

農業は面白い商売

何やら暗澹たる気持ちになつてしまいうような話ばかりで、農業はもう終わりじゃないかと思われるかもしれませんが、勘違いしないでください。

宗教哲学みたいな話になりますが、人間は必ず死にます。だからと言ってやっている事を総て否定しては何の向上にもなりません。いつかは終わると分かっている現状

より少しでも良くしようとするのが、本当の向上心です。

哲学者ニーチェは、二ヒリズムという、否定することが総てのような考えをもっている、最後には自分の存在をも否定してしまいました。そんな彼でも、畑で農作物を作るのは好きだったそうです。

農業を生業とする者は、自然相手の生産で、不安定要素が多く、公務員のような安定収入は無理かもしれませんが、通常であれば公務員の数倍の収入が得られるようにするべきです。そして儲けるためにはどうしたらいいか、もっと真剣に考えるべきです。

人任せの商売から、生産—

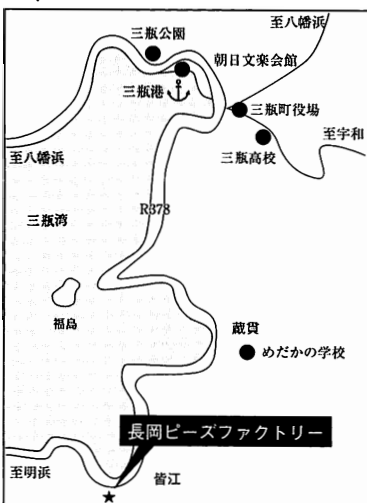
販売—回収を自分で管理し、人に頼らざるを得ない場合も利益管理は自らが行うべきです。手作業しかできない部分以外は機械化をすること大切です。コンピュータも使うべきで、

後は本人のやる気です。

やる気といえは、県内でもやる気のある農業従事者がたくさんいます。農業法人会のメンバーたちですが、会う度に刺激を受けて感心させられることばかりです。

このメンバーは、農業の品目は分かれています。利益主導の活動を視野に入れ、儲ける農業を目指している人が多いのが特徴です。時流は確かに右肩下がりですが、まだまだやり方ややる気によって、農業は商売として充分面白いのではないのでしょうか。

元氣を出して皆さん、がんばりましょう。



ワールド・ファーマーズは 農家の手足です

(有)ワールド・ファーマーズ 代表取締役
(吉田町) 森 崎 正

研修に出かけました。

さらに、派米研修生として二年間、アメリカ・オレゴン州の肉牛農家で研修を受けました。

昭和五十年に帰国後、町内の気の合う仲間五人と「若い力と汗を出し合い、世界を見すえ国際的に通用する農業」を合言葉に、「ワールド・ファーマーズ」を結成し、町内にあるわずかな水田を期間借地して大規模ムギ作経営への第一歩を踏み出しました。県内では、重信町の牧さんたちのグループよりも早い時期だったと思います。

アメリカで見た大型機械で大規模に経営する省力農業が、将来の吉田町の農業に必要であると考えたからです。

しかし、吉田町の水田二七haのうち二〇haでムギを栽培しても、機械の稼働日数はわずかなものでした。そこで、機械の有効利用を図るため、水稻栽培の作業委託を始めるとともに、近隣の三間町、広



(有)ワールド・ファーマーズの皆さん
後方左端が森崎氏

見町、宇和町へも借地を広げました。

ところが、ちょうどこの頃から米余り現象で、減反を迫られるようになったのです。転作作物として長崎県の友人からバレイショを勧められ、大分県湯布院町の未墾地八haを借地し開墾して、バレイショ栽培に取り組んだりしましたが、労力の割には収益が上がり、配当金も出せない状態になりました。

借地料の値上がりやさらなる転作の強化もあって、大規

模借地農業にピリオドを打つ時期を迎えることになったのです。

ミカンづくりのサポートへ

仲間の中からも、我々の農業のフィードバックは吉田町の柑橘農業であり、これからは人の高齢化、ミカンの老木化による産地の衰退に対して、安定生産に向けてどう取り組むかが重要で、そうした視点に立った事業展開をすべきではないかという意見が出ました。

ちょうどこの頃吉田町では、南予用水のスプリングラー事業が進行しており、スプリングラーの敷設が先行すると、軽トラが通る園内道をつくることも難しくなるため、園地のインフラ整備と改植を進め、園地の若返りを図ることにしました。

また、地元農協と水田の作業受託契約を結び、農協を窓口として機械作業の請負を始めた。

こうして昭和六十一年に、

吉田町は、ミカンの町です。愛媛県南予地方特有の「耕して天に至る」段々畑のミカン園が、宇和海に面して続いています。

大規模借地農業をめざして

私も、ミカン農家の子供として生まれましたが、どうせ農業をやるなら親父とは違ったことをしてみたいという思いから、高校卒業後二年間、大分、愛知、北海道の農場へ

主に農業後継者だった仲間も再編成し、農作業請負組織として再スタートを切ることにしたのでです。

ちょうど私の家でも、両親がだんだん年老いてきて、三・二haの樹園地の管理に限界が来ていました。

そこで、自らの園地の園内道や作業道の設置を、毎年一園地ずつワールド・ファーマーズに委託して行うことにしました。さらに、外国人研修生の受け入れに積極的に取り組み、家業の柑橘経営の労働問題はなんとか解決することになったのです。

法人化して

平成四年、ワールド・ファーマーズの法人化に踏み切り、



「ワールド・ファーマーズは農家の手足です」をキャッチフレーズに、①農業の機械作業請負、②農業土木の請負、③これら関連する一切の業務を事業目的として、資本金三百万円、社員三人の有限会社になりました。

まずは柑橘園の園内道や作業道の設置を本格的に実施し、次に最も重労働でだれもが嫌う防除作業の機械化に挑戦しました。

防除機としてスピード・スプレイヤーを入れるためには、園内道はかなり作らねばならず、何かいいものはないかと探していたところ、高知県の幡多郡に大型スパウダーがあるというのを聞いて、見に行き、メーカーに作ってもらいました。これだと、水平で五〇m近く飛ばせるので、園内道が少なくても対応でき、水田の防除の請負もやっています。

ワールド・ファーマーズでは、農業土木機械のリース方

式を最大限活用し、作業料金をなるべく安く抑えて、農家の負担を少なくするよう努力していますが、年間を通した作業の確保や福利厚生面ではまだまだのところがあります。

労働力が余る時期を利用して、たい肥の製造販売を手がけたり、農産物の加工・販売事業に取り組んだり、漢方薬のウコンの試作研究をしたりとあれこれ挑戦しています。

手作業の人材バンク設置へ

今は、機械を使った農作業の請負だけですが、農家の高齢化により、ミカン獲り作業などでの人手不足が予想されます。そこで、作業能率に見合った賃金の設定を基本に、高齢者や女性、非農家を問わず人材バンクに登録し、ミカン獲りや袋がけなどに、登録した人を派遣できないか検討しているところです。

また、これからの農業は、生産者と消費者のコミュニケーションがなければ成り立た

ないと思います。そこで、消費者の方に農村に滞在してもらい、子供たちと一緒に体験学習をしてもらうことも考えています。

農業後継者が減少していくなかで、後継者育成は農業者自らの責任において確保・育成すべきだと考えています。「楽しくなければ農業じゃない。楽しくなければ、後継者は出てこない。」というのが私の持論ですが、これからも危機感と緊張感を保ちつつ、楽しみながら次世代につないでいける農業者でありたいと思っています。



重機を使った園内作業道の設置作業

中山間地の これからの“農”

愛桜会 会長

(川内町)

菅 野 哲 三

疎が進みつつある井内地区を盛り上げ、活性化を図ることを目的に、平成六年十月に結成されました。会員二十人のほとんどが兼業農家です。

主な活動としては、ボタン祭の開催があります。会のメンバーが、島根県で見たボタン園をヒントに、平成二年に休耕地の棚田約二〇㍍にボタンを植え、それが見事な花をつけるようになり、ボタンの隠れたる名所として、口コミで広がってきました。

私たちの住む井内地区は、川内町の南部に位置し、井内川沿いに棚田が広がる典型的な中山間地域です。

集落を上がって行くと、井内峠のトンネルを抜けると、久万町直瀬に出るので、子供時分には、岩屋寺の縁日に歩いて行ってくるというようなこともしていました。

「愛桜会」の取り組み

私たちの「愛桜会」は、過

そこで、愛桜会で除草や施肥などのボタンの世話をし、例年花の見頃となる四月下旬に、カヤ葺きの今は住んでいない民家を「ぼたん茶屋」と名づけて主会場にし、近くの主婦にも手伝ってもらって、ボタン祭を開催しています。家族連れなどでにぎわい、好評を博しています。

また、昔岩があつた小手ヶ嶽を桜の名所にしようと取り組んでいます。

ここからの見晴らしはよく、地区全体を一望できるので、最近竹が生い茂り、行く人もいない状態でした。そこで、竹を切り桜を植え、会員が所有する重機を使って遊歩道をつくりました。

実は今から十五年くらい前に、井内川の河川敷に町の花である桜を植えて、公園にしようという話が持ち上がり、有志が集まって桜を植えたのですが、結局、河川改修工事のじやまになるからということで、桜の木は切られてしま



棚田のボタン

い、会も自然解散状態になってしまいました。

そのときの会の名前が「愛桜会」で、現在とメンバーは違っているのですが、今回も同じ名前を使っていることもあり、今度こそという気持ちでやっています。

この他、都市の非農家の人たちと、田植えから刈取りまで共同作業による米づくりを行い、収穫祭もやりました。

高嶺ルビーの花畑

また、愛桜会の活動とは別なのですが、井内地区には赤

ソバの栽培を行っていると
ろがあります。

会員の一人が、真っ赤なソバの花を新聞で見で、いろいろと探して、やっと種を手に入れた。平成九年から栽培を始めました。知り合いに話したところ、町外を中心に非農家の人たちがのってきて、ソバの品種名をとって、「高嶺ルビーの会」ができました。

八月下旬に種をまくと、十月上旬には小粒で可憐なピンクの花が咲き始め、日に日に赤みを増し、一面ピンクのじゅうたんを敷き詰めたようになります。



赤ソバの花畑

当初五畝だった作付面積は順次増え、いまは四〇畝となり、棚田二〇段ほどで栽培しています。一昨年、昨年は子供たちにも珍しい花を見せてあげようと、町内の保育園児や小学生を集めて写生大会も行いました。

また、収穫した赤ソバは手打ちにして食べます。赤ソバと言っても実は白く、手打ちにした時のノド越しの良さが特徴で、味の評判も上々のようです。

課題はいろいろ

このように書いてくると、順風満帆のように思いかもしませんが、内実は厳しいものがあります。栽培面積の拡大とともに、非農家を中心とする「高嶺ルビーの会」の限界が見えてきました。皆さん、趣味程度ならやれるのですが、草刈ひとつとっても、草刈機を使える人すら少なく、地元

の負担が大きくなっています。また、地元としては、ソバ

を特産品にして、手打ちソバを食べに来てもらうようにしたいかないと、活性化にはつながらないところがあります。

また、「高嶺ルビー」では景観はいいけれど収量が少ないので、収量が多い「グレートルビー」を入れたり、ソバ茶の原料を作ったりといろいろ模索しています。

「愛桜会」の方も、会員のほとんどが兼業農家なので、なかなか時間が合わず、全員が集まって何かをするということが少なくなっています。

草と獣との戦い

今、県内の他の中山間地もそうなのでしょうが、サルやイノシシ、タヌキなどの外敵と草との戦いにあけられています。

兼業農家がほとんどという状態で、草は放っておくとどんどん繁殖しますし、人が山へ入らなくなったせいか、サルやイノシシが本当に人家のすぐ近くまでやってきて、田

畑にある農作物を食い荒らします。今のところ、ソバの被害はないようですが、本当に何でも食べるので、手を焼いているところです。

今年から中山間地域等直接支払い制度が導入されましたが、一反当たり二一、〇〇〇円の五年間補償では、インセンティブが弱いようにも思います。これが十年前だったらまだ：という感があります。

また、棚田整備の話もありますが、受益者の負担金の問題があつてなかなかまとまらないところがありました。ただ、そうは言っても整備しないと、耕作の引き受け手もないというジレンマ状態です。かすかな望みとして考えているのは、棚田の市民農園化です。他の地域から人が入ってきてくれて、何か作物をつくってくれるようになれば、外敵も遠のき、地域の活性化にもつながるのではないかと思っています。

農産物直売所と地域内循環

愛媛大学農学部

助教授

中安

章



農産物の直売は、都市部を中心从古くから存在する流通形態です。高知の日曜市や伝

統的な朝市、観光地・観光農園近くでの青果物直売所等の個別的な直売は、形態を変えながら現在でも存続しています。しかし近年、青空市、直売所等新たな農産物直売所が全国各地で増えました。

愛媛県内でも「からり」、「夢産地」、「あさざり市」等のネーミングの農産物直売所あるいはその部門を持つ特産品センターが設立されています。

今後のまちづくりの意味から、農産物直売所設置の意義とこの直売所を核とした地域内循環システムについて述べることとします。

農産物直売所設置の意義

この農産物直売所設置の意義として次の三点が考えられます。

第一は、価格形成に対して生産者が直接参加していることです。従来の卸売市場流通は、農村から農産物が都市へ

流れ、消費者はそこで購入消費する形態でした。価格は卸売市場で形成されますが、量販店の影響力は大きくなり、生産者はプライステーカー（価格受容者）とならざるをえません。産地間の価格競争が激化し、輸入農産物との競争へと結びついてきました。

直売所タイプの農産物直売、産直の現代的特徴は、都市消費者が農村に来て、農産物を購入、消費する農村小売市場の誕生なのです。価格形成に直接参加し、生産者はプライスメーカー（価格決定者）となったのです。

第二は、対面販売によって情報の相互発信が可能となったことです。消費者に対して、農産物の持つ季節性、「旬」や「食べ方」等商品の知識を広げるように、生産者側からの情報発信がなされます。同時に、逆に消費者側からの受信も可能となり、対面販売等

を通じて消費者自らのニーズを生産者に伝達することが可能となりました。その結果、生産農家に売れるものを生産し販売するという主体性と自覚を促しているのです。

第三は、地域産業への波及効果も大きいことです。直売所が活発になると、生鮮品目だけでなく、出荷者の中で特産品加工部門を増設する動きが活発になっています。同時に、地域内他産業の振興と産業間連携が図られるようになりました。

今後の農産物直売所

本来農産物の流通は、身近な都市と農村の間で共生的な関係の中で成立してきたものです。そのなかで、可能な限り循環的な経済システムが自成していたのです。しかし、大きな社会、流通への転換以降、モノは農村から都市へ流れ、そこで消費された後に循

環しなくなりました。カネも都市内部で滞留するだけで、農村に戻ってこなくなりました。

共生的な関係を成立し得る、身近な都市と農村の間、地域内でのモノ、ヒト、カネの循環システムとしての流通形態を構築することが必要となっています。その意味で、直売所等の取り組みは、妥当性を物語るとともに克服すべき問題点を提示しています。

ただし、直売所は十分な品揃えが農家によって成り立ち、始めて営業ができるのです。そのためには、生産者の組織化が必要となり、需要にあった生産、販売システムと同時に、特色ある農産物と加工品の開発・販売が求められています。また、地域のレストランや学校給食での食材利用は、食の安全性や教育面から重要となっています。

直売所設置の地域産業への波及効果は大きくなっています。直売所に向けた特産品の

加工や観光客への対応を通じて地域内他産業の振興と産業間連携が図られています。さらに、農産物直売所や特産品センターを建設する際の費用支出や雇用創出の促進等によって、地域での経済効果が高まり、Ｕターン者、Ｉターン者の受け皿となりうるのです。その結果、地域資源の再評価を進めることで、地域の活性化やイメージアップを図ることができると考えます。

今後直売所は、地域特産品の直接販売だけでなく、トータル的な地域フードシステムを創る必要があります。あわせて、有機農産物等の安全な農産物生産、販売を進めていく必要があります。

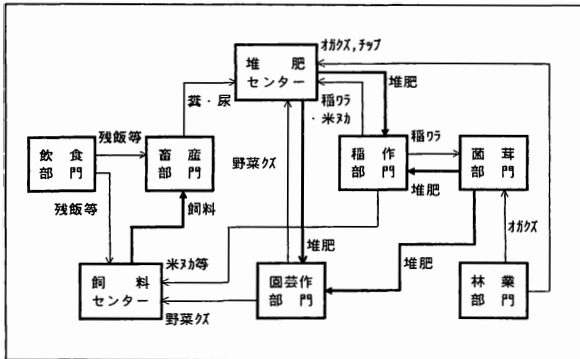
直売所を核とした 地域内循環システム

内子町の「フレッシュパークからり」等は、すでにこの方向を指向しています。現時点で「からり」のもつ直売所、レストラン、シャーベット、

パン、燻製の部門間仕向けが増えつつあります。また、生鮮品だけでなく、農家が加工した食品の出荷も増えています。そして原材料確保の面から、上流集落に加工場を創設し、「からり」との連携により、「山から里へ」出荷された農産物を、調整して再び「里から山へ」戻して加工し、そして「からり」で販売する農産物の地域内循環システムが検討されています。

今後は、農産物の地域内循環に加えて、地域内の同・異業種の生産者間での連携、提携を通じて、各生産部門や飲食などの交流部門で出される、従来は廃棄されることが多い生ゴミやオガクズ、稲ワラ、糞尿なども、地域内循環システムでリサイクルすることが今後重要となると考えます。その例として、私は下図のようなシステムを考えています。今後、消費者ニーズから安全・本物志向に合った農産物の生産供給が求められてきま

す。しかし、堆肥センターの意義は、この有機栽培への対応のみでなく、地域環境保全のための糞尿処理施設としても大きな役割を持ちます。同時に、兼業化の進展に伴う農地の管理での手抜き状態から地力低下の防止とその有機質肥料供給体制を確立する役割も大きくなります。「処理に窮している」状態から地域資源としての「活用」へと転換する必要があります。



飼料・堆肥の地域内循環システム

キラリ光るまち

帰農の里 “高島”

山形県 高島町

たかはた共生塾 事務局長 河原 俊雄

十年間に三五名。ここ「まほろばの里・高島」に移り住んだ都会人の数だ。

町が移住を勧めているわけではない。山形県やら農協やらの奨励制度があるわけでは毛頭ない。緑なす山々に囲まれた豊穡の土地（「まほろば」）が人を引きつけ、汚れ無き土を尊び額に汗を輝かす百姓達が多く、の百姓志願者を魅了した結果なのである。今年もまた二人の新規就農希望者を迎えた。さらに移住の可能性を探る人々が次々に押し掛けてくる。

高島町は、山形県の南部置賜盆地の東南に位置する人口

二万七千人の町である。東京からは山形新幹線で二時間十五分。思いがけない近さに誰もが驚く。農業を主幹とするとは言え、工業団地の誘致なども順調に進み、この不況下にあっても高校生の地元就職率は全国トップを誇る。

東北地方の中では穏やかな気候は稲作、果樹、畜産と多彩な農業を育んできた。日本列島で穫れるものなら、ミカン以外なんでもできる土地柄である。

高島の農業と言えば、全国に先駆けた有機農業が有名である。二八年前、化学農法万能の当時にあつて数十名の若

者達が無我夢中で取り組んだ有機農業は、無農薬栽培技術の確立に寄与するとともに、提携という新しい農産物流通の形を生み出したのだった。農産物を単なる商品として売り買いするのではなく、生産者と消費者の暮らしと命を支える大切な「食べ物」として育て手渡しして行く在り方である。つまり、都市と農村がお互いに支え合うという関係が作り上げられたのだった。

共生を理念として

たかはた共生塾は有機農業の実践者とそれに共感する人々が集まつて十年前に発足した自前の学習集団である。

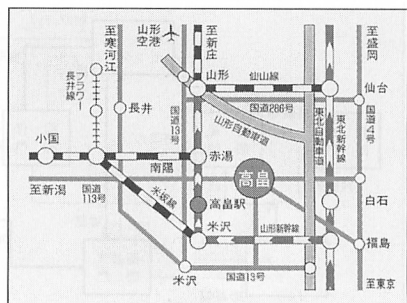
有機農業がたどり着いた考え方、農業ばかりでなく暮らしの中に問いかけてみようとの意図からの結成であった。自然と共生し、地域の人々と手を携え、国際的にも共に生きる道を探るには、有機農業の「生かし生かされる関係」を突き詰めていくことが何より

も大切であるとの認識であつた。現在一二〇名の塾生は高島を中心に全国に広がっている。学者、農民、そして、塾生自らが講師となつて多分野にわたる講演・学習活動を展開している。

百姓入門講座

「まほろばの里農学校」

共生の意義を問う学習・啓蒙活動とともに、共生塾の活動の柱となっているのが「まほろばの里農学校」の開校である。都会の人達を対象にした農業入門講座である。今年で第九回を数える。プログラムのメインは二日間のファー



ムステイだ。有機農業実践農家に泊まって朝から晩までの農作業から暮らしまでじっくりと味わってもらう。その他参加者全員での畑作業や高島町の遊覧などを組み込んでいくが、何と言ってもお互いの心が通い合うのは、夜の飲み会だ。地酒を傾けながら夜の更けるまで語り合う。

都会での生活からすれば夢のような一週間が過ぎれば、身体の間々まで高島の強力な毒素に冒されることになる。"高島病"である。そして、この病が高じた果てにとうとう高島に移住してきてしまうという現象がここ七、八年に



シンポジウム・講演会も活発

新まほろば人の暮らしぶり

わたって続いているのである。

高島に新しく移住してきた人々を、高島のキャッチフレーズ"まほろばの里"を借用して新まほろば人と名付けた。月曜から木曜までは東京でコンピュータソフト開発の仕事をし、週末は田畑で目一杯汗を流す人。フリーのディレクターとして大阪と高島を忙しく往復する人。旦那一人、あるいは奥さん一人都会を離れて高島単身赴任に踏み切った人。嫁入り、婿入りといった古典的パターンだってそろっ



高校生の修学旅行も定例化

ている。わずか二戸の自家菜園から水田三畝の専業農家まで、耕す広さはてんでんバラバラでも、農にかける思いの密度は同じである。

高島の秘密

Ⅱ開かれた田舎

これほどまでに都会からの移住者を魅了した高島の秘密とは何か。有機農業の伝統やまほろばの里農学校の存在は大きい。だが、一番の要因と言え、高島の開明性である。「田舎Ⅱ閉鎖的」こんな図式は高島では通用しない。

まず、受け入れの窓口になっ

これが無類の包容力の持ち主たちである。ともかくよそ者が好きだ。話が好きだ。知識欲に溢れている。そんな百姓たちが本気で世話焼きするのだから、移住者が感激しないはずがない。

しかし、開かれているのは百姓のエリートたる有機農業実践者ばかりではない。隣のじいちゃん、向かいのばあちゃん達のおおらかさもまた、大したものなのである。細かな生活習慣の違いをあげつらうことなく、地域の暮らしの知恵を伝えつつ、生活の場にしっかりと受け入れてくれる。

こんなよそ者への寛大さがある人は中山間地の適度な貧しさを言い、ある人は天領の歴史を挙げる。正解は分らない。

ともかく、おおらかに伸びやかに人を受け入れそれを楽しんでしまう懐の深さ、これこそが高島の秘密なのである。



新まほろば人と大学生の助っ人

みんなで育てる 美川っ子

美川村

大野 早苗

ここ数年、十代の若者が起こす、常識では考えられない事件が多くなりました。

そのたびに、幼児期のことが取り上げられます。それは、幼児期でほとんどその人の人格が形成されるからだと思います。

保育現場で働いて今年で十年目。四、五歳の子どもたちと元氣いっぱい遊んでいます。遊んでいるというと、なんだから楽しそうですが、これが本当に大変なんです。

子どもは遊ぶのがお仕事。

遊びの中で、道徳性や、人のかかわりを身をもって学んでいきます。今の幼児教育の言葉を借りるなら、「生きる力の基礎」を体験によって学習しているのです。私たちはその育ちが、まっすぐ伸びていくようにお手伝いをします。だから、どんな場面も見逃さないように、一緒に遊びながら、援助をしているのです。

個に応じた援助をするためには、一人一人の幼児の把握が大事です。少し前から、入園してくる幼児の情報について、保健婦さんと連絡会をもつようにしました。そのことがきっかけで、今年度からは小、中学校の養護の先生も加わり、村内の子どもたちの情報交換や、悩み相談、学習会をすることになりました。

保健婦、保育士、養護教諭の合同研修会のねらいは、「美川の子どもたちをみんなで育てていこう」です。村民の生活全般にかかわる保健婦さんと、学校関係者のつながりができ、今後は家庭への支援がより適切にできるようになる

のではないかと思います。

美川村は、人口二、六〇〇人に満たない過疎の村です。お年寄りが多く、老人福祉については、かなり充実してきたと思います。いずれ老いていく私たちなので、それに力を入れてすることは安心できます。

しかし、今後はそれ以上に、教育にも力を入れていかなければいけないと思います。この高齢者人口の多い村を支えていくのは、私たちや、子どもたちなのです。

名前のとおり川の大変きれいな美川村です。何年後かに町村合併されて、「美川村」はなくなっても、この美しい自然は残ります。受験などで離れても、いずれは帰って来て、ここで暮らしていきたいと感じる子どもにも育ってくれるとうれしいです。そうなるように、私たちは、自分たちの住む美川村の良さを、子どもたち

ちにたくさん伝えなくては！

私は美川村が好きです。旅行が好きで、時間とお金があれば海外にも行くし、高速道

路時代になったので車で出かけることも多いですが、やっぱり住むのは自然豊かなふるさと美川村！

今年度、私は四歳児を四人受け持っています。二〇年後のこの子たち、私、そして美川村……。いったいどうなっているのでしょうか。明るい未来を予想しつつ……。





愛媛の最西南端のここ南宇和郡は、地元の人間から「なんぐん(南郡)」となんとものびやかな名で呼ばれている。「光は南から」。この合い言葉を聞いたのは、十数年前である。この地から光を発しよう、全国に向け、世界に向けてとの壮大な志である。

「光は南から」

城辺町

兵頭 朝美

幼い子供を四人抱えて引越越しを繰り返していた二十代にこの地に来た。おむつやミルクや流行り病が一段落し、一番上の子供が小学校に上がる頃、お預けになっていた世間とのつきあいが否応なしに押し掛けてきた。人に飢えていた分、ほこりをおぼった常識や情報の欠落もかまう余裕なく、やみくもに動いた。恥も有頂天も共に有りだ。若い時分は気疲れしていた同性との付き合いも、子育て・家事・家計・愚痴の体験共有で一挙に花開き、閉じこもりで失った時間を取り戻していた。その中で、同じ志を持つ仲間との出会いがあり、いつか一緒に活動を始めていた。

私の繰り返す日常。朝、鏡に映るむくんだ顔に見入りながら、一日分の元気をかき集める。自分の歳とはさらばである。そして、家を出る。活動を終えた深夜、歯を磨きながら一日の澱もあちこちから掻き出し、鏡に映る顔に、置いといた自分の歳を重ねる。それでも、元気である。「お会いすると、私も元気が出ます。」と、季節の挨拶状によくこのメッセージが添えられて届く。たぶん人目にも、元気なんだらう。

この街に来て二十二年、気づくと見送る側に立っていた。しかし、見送る寂しさもあるが、

出合いを楽しむすべも知った。気がつく世界がキーワードとなつている子育ての活動もその一つである。子育て支援ボランティアグループ「こぶたたんぽぽチケットとんぼ」。いつの間にか手短く「こぶた」といい、自分たちのことを「こぶたのお母さん、こぶたのおいちゃん」と言い慣わしていた。

「孤軍奮闘。その辺の母が十数人、何もない所に手持ちのもので自分たちの居場所——「こぶたの広場」——を創りあげる。「子供達に楽しいワクワクした体験をさせてやりたい」、そこで、そんな機会を「無くても作る。無いから作る。」と動く。お金も機材も保管場所も無いけれど、終わると消えてしまう数時間の遊びの広場作りなら、私たちにも出来そうだと続けている活動なのだ。

無いものの強み、とにかく体を動かして集めてきて、生かじりの知識や経験でもフルに生かして、手伝ってくれそうな人をお願いしてと、狭い町の、それだからこそ集約されている情報網の助けを借りて、活動を蓄積している。そのプロセスの中で孤立した親の間に連帯感が生まれてくる。」

遠慮なく助けを求め、得た力はお返しと続けてきた活動の中で、世界との出会い。サンタ

を引き受けてくれたアメリカのレッドさんと二十名近くのアジア・ヨーロッパ・中近東・オセアニアの同僚たち。ルワンダ難民のルイスさんと支えるKOMER Aの和喜田さん。アイルランドに行った真奈美ちゃん親子とイギリスに帰る子門君親子。サブランディアとして、乳幼児やハンディキャップを持つ子供を抱えて、また、学校を失った子供達の為に日本で活動される方々との出会い。地域で蓄積された心の広がり世界に及ぶ。

もう一つ、障害者の居場所づくりに関わってきた全国の有名無名の人の訪れと出会いを得た活動がある。この地で十数年前「南宇和精神障害者の社会参加を進める会」が発足し、今では街の祭りに欠かせぬ存在にまでなった。「みんなついでなんやけん」と、晴も曇も共に過ごす暮らしを目指して活動している。ここから、この地から発信するとの気宇壮大な「進める会」のスローガン、「光は南から」。大いなる言葉は、活動に伸びやかな歩みをもたらすようだ。初めの一步を踏み出す。始まりはいつもそこから。気づくと、元気をもらい、元気を差し出して一緒に歩いている。

吉海町第三セクター(有)伊予大島「ローズ館」は、平成十一年四月二十日、橋の開通にギリギリ間に合わせてオープンしました。

二階が食事と喫茶を提供するレストラン、一階が郷土の産品とバラグッズを販売するショップ、その奥にじゃこ天を作っている「魚肉練り製品加工室」と「農産加工室」、「水産加工室」、「バラポプリ室」があります。

吉海町の全国公募により私がこの島にやって来た昨年八月末日の時点では、押し寄せる観光客の対応に追われ、「ローズ館」は本来の使命(目的)から大幅にずれ、観光地にあるがちな「おみやげ物屋さん」と食堂」と化していました。「立て直し」と言えば何かエラそうで申し訳ないのですが、この一年間自分がしてきた事を書き連ねてみる事にします。どこかで参考になれば良いのですが…。

「いらっしゃいませ」

「ありがとうございました」

スタッフは全員主婦のパートです。島で生まれ育ち、島から出て暮した事のない人も

います。ほとんどの人が、お客様相手の仕事をした事がありません。

一番目の努力目標は明るく元気に「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」を言う事でした。次が「少々お待ち下さい」「お待たせいたしました」。その次が「お時間がかかりますがよろしいですか」とか「ごゆっくりお召し上がり下さい」といった少々ワザ有りな会話を自分のものにする事でした。

どうしても知らない人の前だと声が小さくなり、知っている人だと声も大きくなり、話す量まで多くなってしまう。外からのお客様も土地の人と話したいと思っていいますから、自分が良いと思う吉海のセールスポイントを島の言葉で伝える努力をしよう、心を伝えようが第二目標でした。

コーヒーは
三十分で
捨てる事

コーヒーは、一回のドリップで十人分も出来てしまいます。

喫茶店のおとしてコーヒーを出す事は不可能としても、ホッとすると時は提供したい。コーヒー好きの私が何とか「ゆるす」としたのは、ドリップして三十分以内の物でした。タイマーをセットし三十分たったら潔く捨てる。注文が入るまでドリップしない。当然カップは温めておく…。と決めてはみたものの、これがもったいなくて捨てられない。タイマーが鳴っても、あと十分、もう五分と引き伸して出そうとする。

「主婦はどうしても捨てられないんですよ。」「ここでは主婦ではありません!」「だって、もったいなかろ。」「まづいコーヒーを出してお店の評判が落ちる方がずーっともったいないんです!」「でも…。」「で

八月までは冷凍の出来合いのケーキを解凍して出していたのですが、九月からは「お母さんケーキ」で良いから本当の手作りケーキを出そうと思いました。幸い簡単においしく焼ける

オリジナル
ケーキセットを作ろう!

もじゃないんです!」「……。」「じゃあ、タイムオーバーのコーヒーは皆で飲んでしましましょう。」「斯して、一日何杯ものコーヒーを皆で飲む羽目になりました。



山口真佐美

チーズフレケーキの作り方を教えて下さる方がいて、アルバイトで入っていた女の子のお母さんが焼いて下さる事になり、その後、彼女が考えた「バラジャム入り生クリームがけシフォンケーキ」はテレビに何度も登場する大人気メニューとなりました。

このケーキは、コーヒースセットで四百円で出しています。コーヒードけなら三百円。ケーキが付いて四百円とくれば絶対セットの方がお得です。安くておいしいこのケーキセ



和やかにスタッフで宴会

「ローズ館」奮闘記

～レストラン編～



(有)伊予大島
ローズ館
館長

ットは、本来お客様の全くなかった三時のお茶タイム最後の集客に大いに役立ってくれました。

ついに売り上げ二千円！

冬の訪れと共に、パツタリと客足も途絶え、レストランの売り上げもどんどん落ち、二月にはついに二千円台を記録してしまいました。このままでは三ケタも夢では有りません。

とにかく島民の方に来ていただかなくては どうしようも無いのですが、オープン以来、悪く言われ続けたローズ館です。から、なかなか足を向けてはくれません。

そこで考えたのが、月刊「ローズ館便り」の新聞折り込みと手作り教室の開催でした。ケーキセット付き・材料費込み千円。しかも二時間貸切、

先生付き。参加者が「ローズ館って結構良いわヨ」と一人でも多くの方に伝えてくれる事を、お大師さまに願いました。赤字覚悟のこの企画は大当たりで、寒い冬の間の努力が春から実を結ぶ事になっていきました。

コース料理に挑戦！

昨年九月の再スタート時、ご飯は左、スープは右から始めたレストランチームも、このお盆にはコース料理が出せるほどになりました。もちろん全部のお皿が並んでしまうタイプのものですが、真新しいランチョンマットの上にグラスワイン、スープ、サラダ、パン、メインディッシュ、デザートと続けて出すのは大変でした。どう考えてもナイフとフォークが必要なのにお箸だけが出ていたり、グラスワインがグラスの上までピッチリ入っていたり、パンがカチンコチンに焼けていたりしました。

お盆休みの大サービスとして、〇〇〇円、二〇〇円を出したメニューは島の人達を中心に沢山注文してくれて、本当にうれしかったものです。

このメニューに対して、外からのお客様が「田舎なのになんばつてゐるわネ」とおっしゃっているのを何度か耳にしました。

田舎は余計ですが、確かに私達はがんばりました。夏休みに沢山来るであろう子供達の為にバナナを丸一本使った「バナナチョコパフェ」も始めました。吉海のスイカジュースやハーブティー、はちみつティーも始めました。

しまなみ海道全体で売上げが大幅ダウンしている中で、ローズ館も例外では有りません。一階ショップの売上げはドーンと落ちてしまいました。その中でレストランは大健闘してくれています。

徹底的に吉海の食材にこだわった「ひじき丼」を中心とした「吉海膳」で、ひじきのおいしさを解ってもらい、売り場のひじきは、あつという間に完売しました。まだまだ気を許すとコーヒを捨ててなかつたり、アイステイがぬるくて薄かつたりしていますが、この一年こうしてがんばって来た成果は確実に出ています。



ふるさとへの愛情で

スタート

「県境篠山騒動どろんこサッカー大会」は、平成三年に始まった地域おこしのイベントで、今年で十回を迎えた。今やどのメディアにも支援され、ユニークな話題として取り上げられるほどの人気イベントになった。それを企画、

運営しているのが、私の所属している「篠山（ささやま）クラブ」だ。

クラブのメンバーは、現在三十八人、農林業や会社員、役場職員などさまざま。ふるさとへの愛着や住みよい篠南（ささな）地区づくりへの情熱の強さで固く結び付いている。特にメンバーのうち十一人が高知県に住むというのは、篠山の南側に位置するのが一本松町正木地区であり、同地区と篠川を挟んで隣接するのが高知県宿毛市山北地区であるからだ。昭和五十年に「県境を越えて助け合い、互いの未来を考えよう」とクラブを結成した。

クラブでは、愛媛県側から高知県側へ二五〇匹の鯉のぼり渡しを行ったり、太刀や鎌を用い鎧を着用し、四百年の歴史を持つ県の無形文化財である花取り踊りの伝承、盆踊り、秋祭りなど、地区内の全ての行事を熱心に取り組んできた。

平成三年に、従来の行事を消化するだけではおもしろくないから、「みんなで燃えるような感動するものをつくろう、自然に恵まれた県境の地域をアピールしよう、地区民全員が交流でき、活性化にも役立つ独自のイベントを」と、地元有志や公民館主事が一ヶ月間、毎晩集まり飲み食いしやべり、いろいろなアイディアを模索した。前年に地元の南

宇和高校が全国サッカー大会で優勝したこともあって、町おこしに「どろんこサッカー」のイベントとなった。「篠山騒動」とあるのは、室町時代（一四六九年頃）に予土国境の境界争いが起こり、江戸時代（一六五七年頃）の伊達、山内藩が命運をかけた篠山騒動にちなんで付けた。当時は、まさに「泥仕合」だったという。

どろんには篠南のぬくもり

稲刈りを終えた田んぼに水を引き入れどろんにする。

コートは、トラクターで田

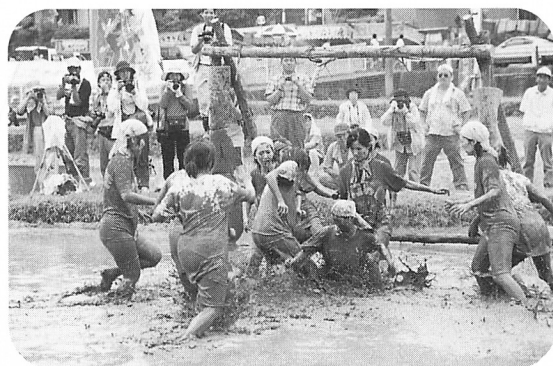


篠南のまちづくりについて語る
(ミニフォーラムin篠南)

んぼを耕し、水が漏れないように「あぜ塗り」という作業が必要となる。この作業は泥寄せ鍬で堤防のように作るわけだが、なかなかうまくいかない。そこで、農業のプロの登場となる。表彰盾は八十年以上の「檜」を使い、一つ一つ磨き上げたこだわりの逸品。それぞれが職人技を発揮している。食事は、婦人会によるおにぎりや、地元で捕れた猪肉をふんだんに使ったうどんなど。運営資金は、寄付ばかりに頼らず、山の草刈りを請



泥まみれになっても すてきな笑顔



今年より女子の部もでき、ハッスルプレー



試合後は清流「篠川」で泥を落とす

負って調達。

このように、地区全体が文字通り「篠山騒動」となる。

大会では、サッカー以外にも、大人も子供も楽しめる

「どろんこフラッグス」がある。

旗をめぐって、走って、転んで、滑って、飛び込んでよご

れども、この日ばかりはみんな笑顔がたえない。このどろ

には篠南の大地のぬくもりがあつて、参加者全員を優しく

包んでくれる。

これからの

「篠南の里」づくり

今年は、十周年を記念して

過疎地域の町おこしを考える「ミニフォーラムin篠南」を前

夜に開催し、県内各地でまちづくり活動に取り組んでいる

人など八十名が集まった。

地区住民や歴史研究家ら五名がパネリストとして発表。

地区外から嫁いだ主婦は、「どろんこのイベントを通じて、

子供たちは大人が頑張る姿を見ている。」「故郷に住む喜び

を子供たちに伝えたい。」と訴えた。

参加者からは「町のイベントとして定着してきたね。もうやめられんね。」と励まし

がある中、会員から「十年一区切りと言うしねえ・」との

弱々しい声も聞かれるのも事実である。

スタートからの会員は、五

十歳代となり大半が卒業した。加入してくる新会員に、何の

ために始まったのかを伝える方法が薄れていたことも反省点の一つであり、問題点の交通整理をする時期が来たのかもしれない。

しかし、そんな地元イベントで得たつながりを、他の地区での接点で拡大し、各地区の公民館事業に役立てることができたことも事実。地域によって会員一人一人が目覚めたことが、篠山クラブの歩みにとって大きな励ましとなった。

十年たつて、ようやく自分の心も、目線の低い鉄棒から大きな鉄棒へ、そして少し自分の背より高い鉄棒に飛びつく事ができた。

これから少しずつではあるが、振りを大きくしながら、「自分たちのあるべき地域」の位置に着地する場所や時を考えている。



— 研究員レポート —

長野へ 町づくりの先人を訪ねて

研究員 三好 誠子

六月下旬の三日間、町づくりのキーマンといわれている人達にお会いして話を聞くべく、藤田主任と二名で長野県に向かい、まず飯田市に入った。高台から緩やかな起伏を描いて市内が一望でき、あいにくの雨模様で薄もやには包まれていたものの、ふんだんに植わっている木々の緑と山々が美しいコントラストで

私達を迎えてくれた。

その飯田市で、まず文化会館を訪ねる。ここには、人形劇フェスティバルに深く関わっておられる寺谷純一郎氏がおられ、人形劇についての熱い思いや飯田に来ての苦労話、今後の抱負などを気さくな語り口で話していただいた。というのも、寺谷さんはもともと四国それも松山に永く住んでおられていたということ、私どもの訪問をひどく懐かしがっていただき、こちらとしても最初の訪問地で緊張していた気持ちがほぐれていく感じだった。

次に高橋寛治さんとの待合場所の飯田市美術博物館に向かった。ちょうど収蔵品の整理のために休館中だったため、奥にある柳田國男館へ。この建物は「民俗学研究所」を移築したものであるが、その後の活用が素晴らしいと思ったのは、市民の立場から柳田学を学ぶ活動が続けていることである。月一回の講座が十年

以上、自主的に続いているというのは風土的な要因はあるかもしれないが、実に地道で地域に根ざしたこれぞ市民活動、と思えるものだった。もちろん高橋さんも関わっておられるそうだ。

夜は高橋さんのなじみの居酒屋で、市役所職員の方二名を加えての町づくり談義となった。とは言っても、私はもっぱら皆さんの意見を聞くのみ、高橋さんの実際にやってきた行動に裏打ちされた言葉の重さが、容易に私の口を開かせてくれなかったのかもしれない。酔うほどに陽気に、饒舌になる高橋さんの話に驚きと尊敬を持って聞き入った。

翌日は南へ下って、浪合村の近藤庸平さんを訪ねた。まず村内の小中学校、保育園がひとつの建物として機能しており、その他の施設も含めて村民に開放されている「浪合学校」を見せていただいた後、近藤さんが手がけた「トンキラ農園」へ。そのの囲炉裏端



浪合村の風景にとけこんだトンキラ農園

で人間味あふれる元気なおばあちゃん達の手料理をいただきながら町づくりに対する近藤さんの話を聞くという、贅沢な時間を過ごさせていただいた。

いずれにしても、どなたも住んでいる地域を愛し、住んでいる人を愛し、それでいて目線は広く世界を見据えている。行政に携わる人間としての本業の姿を見たような気がした。

その後の小布施での素晴らしい経験のことは、またの機会に…。



— 研究員レポート —

『市民』の力 ～新潟県村上市を訪れて～

研究員 森田 浩二

背後に磐梯朝日国立公園を控え、洋々と流れる三みおもてがわ面川。四国に住んでいると川に水が流れていることすら新鮮に思える。城下町、武家屋敷の街、鮭が帰るまち。新潟県村上市。そこには、自分たちのまちを自分たちの手でつくろうとしているハイセンスな『市民』意識が芽吹いていた。

八月二十四日、新潟県長岡市



都岐沙羅パートナーズセンター

で開催された本年度の自治体学会に参加。テーマは「分権・自治、新潟からの新しい波」。居眠りしている自治体はどこかに吸い込まれていく時代になったことを痛感させられる。参加した分科会は「まちづくり中間セクターの設立と展開方法」というテーマ。地域おこしに、一応の成果がみられる地域には、うまく行政と住民とを繋げる中間組織がある。

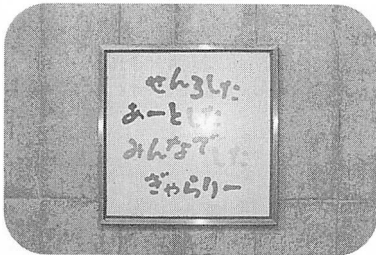
そこに、今回お邪魔した村上市を含む一市六町村の岩船地域でのまちづくりの仕掛け人、大滝聡氏がパネリストとして登場。昨年立ち上げた

「都岐沙羅つぎさろパートナーズセンター」の概要、事業の内容について事例発表。新潟県が広域単位で進める地域活性化事業「里創りまうプラン」の中で、岩船地域住民の仕事起こしや、社会的に意義のある活動を広域的・総合的に支援する為の拠点を目指しているとのこと。

分科会終了後、大滝氏の車に便乗。長岡市から一路村上市へ。一二〇km、約二時間。夏の終わりの少し寂しいけどとても美しい日本海の夕日を見ながら。

そこで我々は、村上市内の観光客や市民のための「歩行者サイン計画」の二回目のワークショップに参加させてもらう。ワークショップ

は、ずぶの素人。知らない土地も手伝って少し戸惑いながら、迷惑をかけないように。どんな施策でもワークショップを通して



地下道のギャラリー

て、お年寄りから若者まで、主婦から行政職員まで市民参加が進んでいることに感心する。

翌日、ワークショップ形式でつくった地下道のギャラリーなどを見学し、短い時間で本当に残念であったが、村上市という決して大きくない街で、大滝氏たちが植え付けていった市民参加のまちづくりが少しずつ芽を出し、実を結びつつあることを肌で感じた。武家屋敷の町並み保存や鮭が帰る川等、数々地域素材がある中で、一番まちづくりに必要なものは、「民力」であることと同時に。



— 研究員レポート —

“元気な農業” モクモクファーム

研究員 橋岡 勝一

二十一世紀を迎える農業を取り巻く環境は大変厳しい状況ですが、今年六月に京都府大宮町で開かれた過疎を逆手にとる会で、伊賀の里モクモク手づくりファームの木村社長の講演をお聴きする機会がありました。

木村社長の「モクモクファームでは、大手メーカーとは違う独自性のある商品、本物を提供している。どんな時代

でも、おいしくて安心できるものが求められる。この目指すテーマ・方向性が、消費者に共感を与え、支持され、二十数億円の売上げになった。」という話に驚き、「元気な農業」を感じ、その成功の秘訣が知りたくて、モクモクファームへ伺うことにしました。

モクモクファームは、三重県北部の阿山町で、地元の『伊賀豚』のハム・ソーセージや地ビール、米、野菜等の生産・販売、レストラン、体験牧場等の事業などを行う農業公園です。

一日中楽しめる公園

モクモクファームに着いた時、その公園の広さと十数台止まっていた観光バスの多さにビックリしました。

その広い公園の中にはハムやパンの工房、レストラン、乗馬教室等の学習牧場などがあり、たくさんの家族連れや団体客で賑わっていました。ウインナーや生パスタづくりなどを自分で体験できる施設も多いので、一日中楽しめる

公園です。

人が主役の農場

本部事務所を訪ね、木村社長がちょうど手が放せないとのことと吉田修専務からお話を聴かせていただきました。

設立のきっかけは、三重県北部地域は養豚が盛んで、吉田専務が地元の農協職員だったころ、群馬県の養豚農家グループを視察した時、その規模の大きさに「これでは勝てない。より高く売るためには商品化を」と、同じ農協の販売担当だった木村社長と手を組み、『伊賀豚』と名づけ、商品化したことから始まります。そして、さらに付加価値をつけようと、昭和六十二年に、農協を退職した両氏をはじめ、養豚農家を中心とした十九人で、手づくりハム工房モクモク（モクモクファームの前身、平成六年に名称変更）を設立し、ハム加工を始めました。

オープン当初は、「マーケティング上うまくいかず、三か月で三千万円の赤字が出た。」とのことと。そこで、生協の手法で、『モクモククラブ』

を発足して会員を募り、消費者の組織化を図りました。「当時の会員は職員の関係者百七十人だった。」そうですが、現在は二万人以上います。

また、地元の幼稚園からウインナーのつくり方を教えてほしいとの依頼があり、垣根を低くし情報公開しようと、ウインナー教室を開きました。原料、生産者が見えるので、これに來た人たちが製品を買って行くようになり、だんだん工場が狭くなってきました。その時に「消費者は、モクモクに、大手ハムメーカーの小



手づくりウインナー体験施設

さい版になってほしいのではなく、人が主役の農場になってほしいと思っている。」と考え、ハム工場、焼き豚工場などを点在させ、公園化しました。同時に「モクモクは、観光施設でなく、ものづくりの場である。」ので、そこに人を集めて体験してもらい、消費者として組織化しました。

独自性を出した ブランドづくり

ブランド・商品づくりについて、吉田専務は、「消費者はものを買うのではなくて満足感を買っているから、値段が安くできないなら何を考える



モクモクファームのギフト商品ハム・ビールの各種詰め合わせ

かが重要になる。」と言われます。

モクモクファームにも地ビール工場があり、全国で三番目にできました。現在百社以上あり、大手メーカーのマネが多く、そういった所はいつつぶれてもおかしくない状況だそうです。そこでモクモクファームでは、「値段が少々高くても、地域の麦からつくることと、消費者ニーズに合わせると大手メーカーと変わらないので消費者ニーズから少し距離を置くことで、ほかとの違いを示している。」とのことで、大手と違った土俵で独自性を出しています。これは、ここで生産される米やパンも同じことです。生産量は売れる量に合わせて決めています。

また、現在は惣菜部門に注目しています。「この部門は五兆円産業となっていて、惣菜しか売っていないスーパーもある。しかし、現状では農家にはメリットがない。地元農産物を使って、地域の人も入れ込んだ惣菜のチェーン展開をしていく。」との話に、現状に満足せず、新しい分野に

も積極的に取り組んでいく姿勢を感じました。

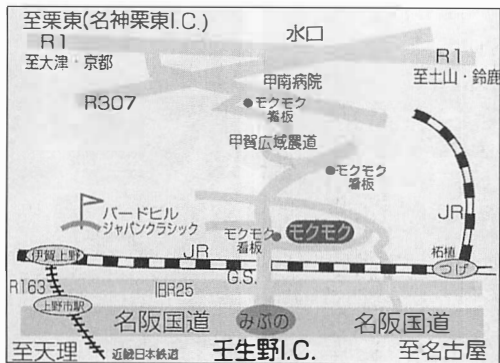
本物が分かるファンを獲得

モクモクファームは、消費者に各工房や体験教室などで情報を公開することで、工場製品でない、原料・生産者が見える手づくりの商品であることをアピールしました。そして、自分たちのものづくりを理解してもらった人を買ってもらうだけではないという考え方で、自分たちのファンづくりをしています。そこで、違いの分かる、本物の消費者



のんびり学習牧場の乗馬教室

をつかんだことで成功したのでしよう。こんな消費者は、ずっとファンでいてくれます。木村社長に「仕事を一日体験させて下さい。」とお願ひして、翌日乗馬教室で馬引きをやらせていただきましたが、子供たちが気軽に動物とふれあうこともでき、家族の交流にも格好の場所です。また、二百二十人いるスタッフの方々が平均年齢二十六歳と若く、みなさんイキイキとした表情で働いています。モクモクファームで、久しぶりに「元氣な農業」を見させていただきました。



“MY TOWN” 弓削島

歩キ目デス & 足ラテス



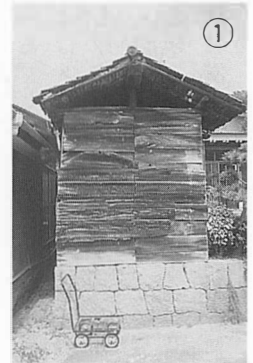
第13弾

岡崎 直司

県境の島

弓削をゆく！

弓削にやってきました。この町の知名度はどの位なんだろう。県下に七〇市町村があつて、果たして一五〇万県民の内何人位が全てをイメージ出来るのだろうか。いやはや愛媛は広いんです。今回もやっぱりと云うべきか、来てみて初めて解る諸々がアリマシタ。



県境の島、弓削島ウオッチングを始めます。まず、この辺りから行きましょう。

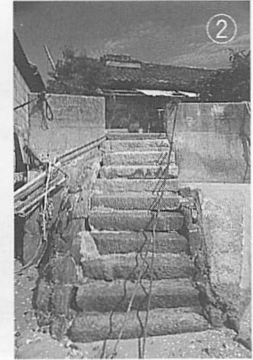
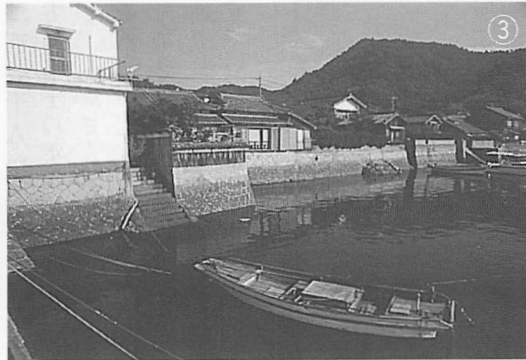
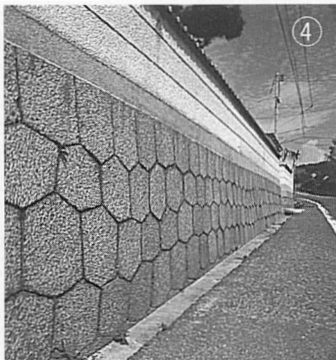
写真① 港町には比較的良好な風景ですが、思えばこんなものですら最近では少なくなりました。船板を利用した壁です。海に近い集落ならではの物件。現代ではグラスファイバー製の船が殆どで、とかく廃船時には産業廃棄物となつて厄介モノですが、その点昔の木船は扱いがしよい。永年海に浸かつていただけあつて、恐らく虫にも強いだろうし、腐りにくい。板の厚味も申し分なく、廃物利用としては見事な処理。時には「侘び・寂び」の世界で、数寄屋建築に用いられ、大出世の船板もある。定年後の人生で花開くこともあるノダ。物は大切に致しましょう。

一緒に移っている押し車は、お年寄りの必需品。島の安全

な交通事情がそうさせるのか、何だかホノボノしている。

写真②③ 海で栄えた土地らしい貴重な風景。弓削島は瀬戸内海の中央に位置して、海運には好立地であつた。昔は至る所にこうした雁木と呼ばれる施設があつたらしい。敷地の裏が海に面して船着き場となつており、かろうじて上弓削地区にそのいくつかが残されていた。こうした現物がまだ存在していることが、弓削の弓削たるアイデンティティで、海を背景とした豊かな歴史の光の部分でもある。石垣も美しい。

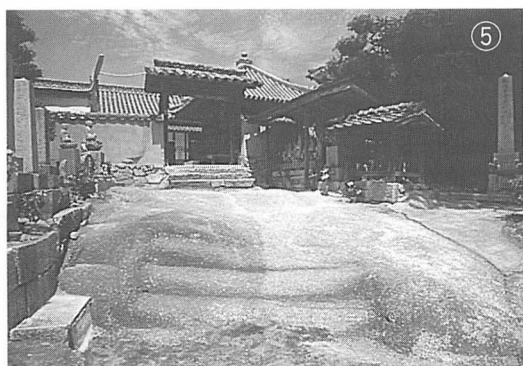
写真④ ここにも花崗岩の美しい石積みがあつた。難易度の高い亀甲積みである。六角形に面合わせをしながら積む石工の技術には、大変な労力があつたはず。よくよく見れば、一個一個の石のサイズはどれも微妙に違つていて、機械生産の均一な石たちでないのは明らかだ。越智郡島嶼部は、大島石に代表される如く豊かな花崗岩地帯だが、町内にある豊島産のそれも、かつて良質な石材として一世を風靡した。町中から石の文化



を色々探して歩くのも面白い。
写真⑤ 定光寺にある自然石の階段。地山の岩をそのまま削って造った、花崗岩の加工段。この奥に国重要文化財観音堂が建っている。

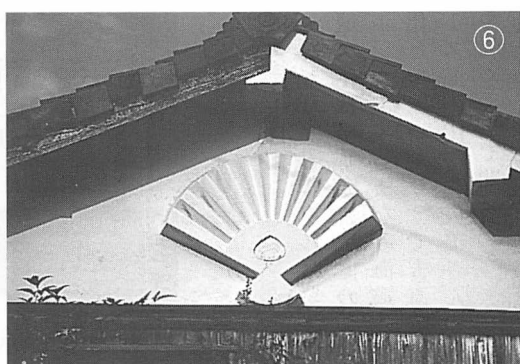
では、このシリーズでもお馴染みの鍔絵をいくつかご紹介しよう。弓削町でも七点発見。ただ、これまでに見た他の愛媛の鍔絵とは少し絵柄が違います。県境なるがゆえの影響も考えられ、広島か岡山か、興味が尽きません。

写真⑥⑦ 下弓削の両梅林家にある扇と三階菱。このは



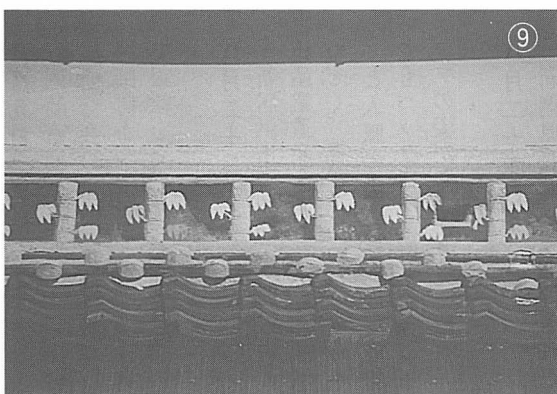
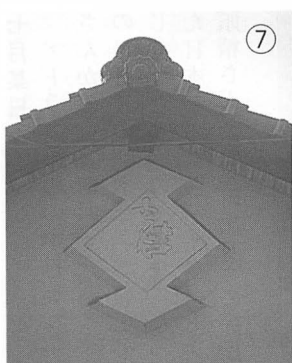
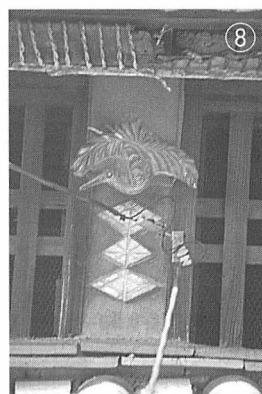
つてりした厚みはタダゴトではありません。県下に八百点を越える鍔絵の分布が解ってきてますが、この感覚はここだけ。

写真⑧ 佐島中浦の網元だった田中家で鶴を発見。明治十八年に岩城の大作によって



建てられたらしいので、その時からの鍔絵とすれば、これまでの調査で県内でも最初期の頃。

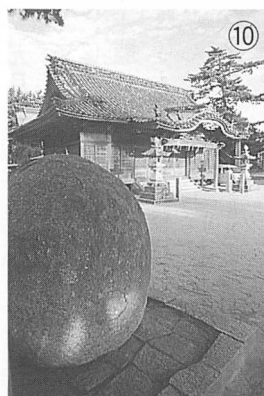
因みにこの家、曾祖父の玄監という人が、かの医聖華岡清洲に学び、その塾頭を務めたとか。いやはや隠れた歴史



が眠っています。

写真⑨ 極めつけは上弓削の田房家。じつと見つめると、竹に笹がデザインされ、とても洒落ている。弓削には二階の腰壁をナマコで飾る（海鼠壁）建物が多いが、花菱やらいくつかの意匠が見られる中で、ここまでやるのはスゴイ。県内では他に見られず、こうした腰ナマコの壁塗り文化は、山陽路文化圏が目と鼻の先にあるここならではの。自分の足でこうして県境に立つことで解る展開です。

おまけ写真⑩ 美しい松原の広がる法王ヶ原に法王さまと呼ばれる神社があります。ナント、道鏡の「キンタマ石」。単なる伝説とはいえ、道鏡恐るべし。知る人ぞ知る、弓削名物「道鏡クッキー」は、そんな島の大らかさを見事に形で伝えている。





某月某日

滋賀県近江八幡市の吉田正樹さんから電話が入り、おうみネットワークセンター主催の「おうみ未来塾」の一期生で、愛媛県を訪ねたいとのこと。

当センター職員の研修にもなれば一石二鳥とお引き受けし、内子町の岡田文淑さんの話、町並みを歩いた後、石畳の宿で「石畳を思う会」の方々にも入っていただき交流、翌日は双海町の若松進一課長自らの案内でシーサイド公園視察と、ちよつと贅沢な日程が実現し、七月十五・十六日を迎える。

七月十七日

京都大学の佐和隆光教授をお招きして新センターの設立記念シンポジウム。約五百人のご参加をいただき盛会。

七月某日

アトラス出版の中村英利子さんから自著が届く。かつてのNHKの朝ドラ「雲の上のじゅうたん」のモデルになった日本初の女性パイロット兵頭精さん（広見町出身）の評伝。



1,600円＋税
☎089-932-8131 (アトラス出版)

七月二十日

伯方町で開催された愛媛地域文化戦略研究会主催のシンポジウム「しまなみ海道の文化と地域づくり」で吉海町ロイズ館の山口真佐美さんの話を初めて生で聞く。

その足でしまなみ交流連携倶楽部の福羅健二さんからお話のあった流化式塩田復活勉強会をハシゴ。冒険家の河野兵市さんや福祉機器「いうら」の井浦忠社長ほか本場に豪華な顔ぶれ。もう少し多くの地元の方に聞いていただけたらと心底思う。

八月九日

岡崎直司さんとリーダー育成研修会の事前調査をかねて、弓削町を隅々まで歩く。佐島で鰻絵を発見するなど収穫。

八月二十日

新居浜市で開催された「近代化産業遺産全国フォーラム」をのぞく。森賀課長のバイタリティと人脈の広さに改めて脱帽。でもバックに「市民」ボランティアの姿がしっかり見えた。

八月二十四日

新潟県長岡市で開催された自治体政策研究交流会議・自治体学会に参加。越後妻有トリエンナーレのアートディレクター北川フラム氏の話が特に印象的。翌日は、政策評価の分科会に出て、大滝聡さんの本拠村上市に向かう。詳細は森田レポートで。

八月三十日

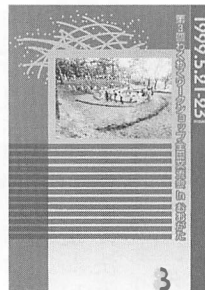
地域づくりリーダー育成研修会「みかん塾」弓削町にて開催。なんでもやっちゃう「ゆげ女性塾」のパワーに圧倒されながらも、シンデレラタイムまで夜なべ談義。農山村での結婚問題で盛り上がる。

九月二日

高知県境の一本松町正木地区で地域ミニフォーラム開催。翌日は、研究会議メンバーとともに老骨に鞭打って「どろんこサッカー」に出場。地域イベントの楽しさを味わう。

九月某日

新潟県の寺島義雄さんから昨年開催された「第三回わくわくワークショップ全国交流会in おおがた」の記録集が届く。



頒布価格 2,000円
☎0255-70-5325 (寺島さん)

九月二十三日

「四国へんろ道」世界遺産化の会の設立総会をのぞく。平成十年一月の仙遊寺での研究会議フォーラムから足掛け三年。関係者の「彼岸の悲願」となったが、これからが長い道のり。



「西瀬戸まちづくり・むらおこし交流推進事業」参加者募集

西瀬戸圏域内で個性的なまちづくり・むらおこしを実践している民間団体や市町村との交流事業を毎年行っていますが、今年から正式に県の委託を受けセンターで実施します。

今回は、宮崎県佐土原町と綾町を訪問する予定です。

- と き 平成12年11月21(火)～23(木)〈祝日〉
- 日程(案) 1日目 14:45松山空港発「佐土原くじら会」と交流
2日目 照葉樹林都市、有機農業のまち、手づくりの里「綾」の視察、
担当者からの説明、関係者との交流会
3日目 午前中まで綾町 14:55松山空港着
- 募集人員 地域づくり活動に積極的に取り組んでいる方 10名程度
- 費用 交通費については、センターで負担
- 問い合わせ まちセン ☎(089) 932-7750 (担当:橋岡、森田)

「第14回地域づくり団体全国研修交流会 高知大会」参加者募集

実行委員長の畠中智子さんはじめ、高知県内の地域づくり関係者が企画運営にあたる今度の全国研修会。おもしろいものになること請け合いですので、隣県でもありますし、多くの方が参加していただければ幸いです。

- と き 平成13年1月26(金)～27(土)
 - と ころ 高知県民文化ホール・三翠園ホテル
 - テ ー マ 「タノシム力(ちから)」
 - 詳 細 <http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Gaien/3923/> (事務局:高知市まちづくり推進課)
 - 問い合わせ まちセン ☎(089) 932-7750 (担当:三好、藤田)
- ※ 参加費用の一部支援(10名程度)を考えています。

魚島村“わったかった”フォーラム 開催

瀬戸内海のと真中にありながら、情報化に積極的に取り組むとともに、下水道普及率100%を達成し、環境にやさしい島づくりを行っている魚島村。そうした魚島村におしかけ、村民の皆さんとともに、地域情報化の課題をはじめ、これからの地域社会づくりについて話し合うフォーラムを行います。“わったかった”の大騒ぎになることを期待して。

- と き 平成12年11月10(金) 14:00～17:00 (予定)
- アドバイザー 墨岡 学 (松山大学経営学部教授)
若松 進一 (えひめ地域づくり研究会議代表運営委員)
- 問い合わせ まちセン ☎(089) 932-7750 (担当:三好、藤田)

★えひめ地域づくり研究会議ミレニアムフォーラム 開催予告★

- と き 平成13年1月20(土) 13:00～
- と ころ えひめ共済会館(松山市三番町)
- テ ー マ 「行政と住民のパートナーシップ」 一本音で語る過去と今 (仮題)

地域課題研究サロン「21世紀の農山村を考える」開催

地域づくりの現場である農山村では、過疎化、高齢化、少子化、花嫁不足等の人口問題と農林業の活力低下により、今何らかの手立てを打たなければ、10年先にも農山村社会の崩壊が迫っているように思います。

そこで、「過疎を逆手にとる会」主催の逆手塾での“過激なまとめ”で知られる熊本大学の徳野教授を迎え、激論する場を設けることにしました。農山村の行く末を本気で考えられている方のご参加をお待ちしています。

■と き 平成12年11月2日(木) 13:30~17:00

■ところ メルパルク松山(松山市道後姫塚)

■プログラム ○基調講演 徳野 貞雄(熊本大学文学部教授)

○サロントーキング

(バトラーから口火を切ってもらって参加者全員で討論)

バトラー 西川 則孝(ちろりん農園)

片山 元治(無茶々園)

※研究サロン終了後、ひざづめ交流会を開催予定。

■問い合わせ・申込み まちセン ☎(089) 932-7750(担当:橋岡、森田)



地域づくり活動者研修交流会「やぶへびさがし」開催

県内各地で地域づくりに取り組んでいるグループ・団体の関係者が一堂に会し、日頃の悩み等を出し合い研修交流する場を、県の委託を受けセンターで設けることになりました。

今回は、(財)地域活性化センター主催の全国地域リーダー養成塾の主任講師を務められるほか、全国の地域づくり現場を歩かれている早稲田大学の宮口教授をゲストに開催いたします。

■と き 平成12年12月9日(土) 13:30~19:00

■ところ にぎたつ会館(松山市道後姫塚)

■プログラム ○基調講演 宮口 侗 迪(早稲田大学教育学部教授)

「21世紀の地域づくり」(仮題)

○フロアトーキング(参加者全員で話し合えるような設定検討中)

コーディネーター 塩崎 満雄(えひめ地域づくり研究会議代表運営委員)

○研修会終了(17:00予定)後、交流会を開催

■問い合わせ・申込み まちセン ☎(089) 932-7750(担当:三好、藤田)



十月に入り、朝晩はもう肌寒さを感じるようになりました。汗かきの私にとっては、過ごしやす一番好きな時期です。

早いもので、センターに来てもう半年が過ぎました。県内外の地域づくりに情熱を燃やしている方々にお会いし、大変勉強になっていきます。そして今は、私なりに地域でできることを、早く見つけようと模索しているところです。(橋岡)

内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

〒790-0003

松山市三番町四丁目十番地一

愛媛県三番町ビル二階

(財)えひめ地域政策研究センター

まちづくり活動部門

(まちづくりセンターえひめ)

TEL089(932) 7750

FAX089(932) 7760

発行/平成十二年十月十日

(財)えひめ地域政策

研究センター

印刷/三創印刷株式会社